指導計画案

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	1 「待つ」とはどのような行為か考えさせる。 2 物語のかたち（一人称の語り）に注目させる。 3 作品全体の内容を大まかに把握させる。	① 二一〇ページの「導入の問い」をもとに「待ちたいもの」を考える。 ② 段落分けを行った後、簡単な感想文を書き、物語のかたち（誰が物語を進行・展開しているのか）を考える。思判表 ③ 小説に描かれた時代背景を理解する。知技	① 生徒に自身に「待ちたいもの」は何かを尋ね、小説のタイトルでもある「待つ」という行為が一般的にどのような意味を含み持つものか考えさせる。 ② まずは作家に還元せず、小説そのものに注目して簡単な感想文を書かせる。また、「待つ」は「私」による一人称小説で、出来事の当事者である「私」の視点で物語が展開することを生徒に伝える。 ③ 細部の読解は次の「展開」で行うが、簡単にこの小説の時代背景をおさえておくことが、生徒たちが小説を理解することの一歩になる。たとえば小説の中に時代を表す言葉があるか問いかけるなどして、「大戦争」という言葉に注目させたい。
展開	1 「私」の心的葛藤を言い直しや長短の文章から読み取らせる。 2 「大戦争」とは何か、その「大戦争」の始まりに「私」が接していることを把握させる。 3 「私」の違和感や不安が「大戦争」が始まる前と後でどのように異なるか考えさせる。 4 「大戦争」が「私」にどのような影響を及ぼしたのか理解させる。	① 〈第一段〉（初め～二一〇・2） 「私」が「誰とも、分からぬ人を迎えに」いくと語り始めたことに注目する。思判表 ① 〈第二段〉（二一〇・3～二一二・2） 「私」が語る駅の情景を把握する。 ② 「私」が人や世の中にどのような感情を抱いているのか理解する。思判表 ③ 「大戦争」とは何か理解し、「私」の違和感や不安が「大戦争」が始まる前後でどのように異なるかまとめる。知技・思判表	① 「待つ」という行為は一般的に期待を込めた意味合いで用いられること（導入で学習済み）を振り返る。また迎えに行くという行為は、たとえ初対面であれ、相手がどのような人物かある程度の情報を得たうえで行うものだが、「私」は「誰とも、分からぬ人」（二一〇・1）を迎えるという点に注目する。 ① 改札口は、目的地（家路や次の交通手段等）に向けて人々が同じ行動をとる場である。「一様に」（二一〇・6）「脇目も振らず」（二一〇・7）というように同じ動きをする人々と、それを眺める「私」という対置、両者の差を板書などで示したい。「私」が人を恐れる背景には「言いたくもない挨拶」（二一一・2）、「当たらず障らずのお世辞」（二一一・4）、「もったいぶったうそ」（同）が示すように、儀礼的な「世の中」（二一一・6）への違和感がある。それゆえ「私」は違和感を抱く必要のない母との親密な関係性を大切にしていることを把握させる。 ② 「大戦争」（二一一・11～12）とは具体的に何を指すのか、末尾の「（十七年一月）」を踏まえた上で当時の資料等を用いて立体的に説明する。あるいは、生徒に戦時下の人々がどのような役割を担わされたのか調べさせてもよい。その上で、「大戦争」が始まったことで人との儀礼的なつきあいへの違和感から、戦時体制により画一化されることに対する不安へと「私」の心情が変化していることに注目する。

時限	展開	まとめと発展
指導上の重点目標		1 「私」が待つものの変遷を追い、その希望の内実について考えを深めさせる。 2 「あなた」という呼びかけが持つ可能性を考え、「私」の物語を主体的にとらえ返す視点を身につけさせる。 3 言語活動への発展をはかる。
学習活動	①〈第三段〉（二一二・3～二一三・1）第一段落で示された「私」の行動を、第三段落とあわせて考える。思判表 ②「私」に生じた心的葛藤をまとめる。思判表 ③「私」が抱える孤独感を読み取る。思判表 ④「私」が自分に対して否定的な表現を繰り返し用いている点に注目する。知技	①〈第四段〉（二一三・2～二一三・7）「私」が「待つ」ものとして何を挙げているかまとめる。思判表 ①〈第五段〉（二一三・8～終わり）「私」が「待つ」ものとして何を挙げているかまとめる。思判表 ②「胸を躍らせて待っている」とはどのような様子を表現しているか考える。思判表
指導上の留意点	①第一段落を振り返り、「誰とも、分からぬ人」（二一〇・1）を迎えに行くという行為の背景に「家に黙って座っていられない思い」（二一二・3）があったことを理解させる。「大戦争」が生活や社会を覆っていくなかで、「私」が得体の知れない焦燥感や不安を抱いていることを指摘する。 ②「私」が「期待」や「恐怖」「諦め」「覚悟」（二一二・5～8）と、心の内を次々言葉を置き換えて言い表し、葛藤している様を生徒に認識させたい。また、「窒息する」（二一二・9）という表現からは「私」が大切にしていた日常が「大戦争」に浸食されていく様がうかがえる。 ③「白昼の夢」（二一二・10）、「望遠鏡を逆にのぞいたみたい」（二一二・11）とは、「私」がどのような状態におかれていることを意味しているのか生徒に考えさせる。 ④第三段落では、「けしからぬ空想」（二一二・8）、「大変淫らな女」（二一二・12～13）、「軽はずみな空想」（二一二・14～15）「不埒な計画」（二一二・16）というように、「私」が自分を（自分が考えたことを）否定的に捉える表現が繰り返し用いられている点に注目したい。ここからは、「大戦争」が、個人の考えにも制約を与えるものだということが読み取れよう。	①これまでも「私」は「誰を待っているのでしょう」（二一〇・11）、「何を待っているのでしょう」（二一二・12）と自ら問いかけているが、この段落では「待つ」ものを挙げては否定して、答え（の候補）がずらされていく点に注目する。 ①第四段落と同じく、ここでも「私」は「待つ」ものに思いを巡らせている。ただし注意したいのは、それが第四段落で見せたような否定とは異なり、「もっと和やかな、ぱっと明るい、すばらしいもの」（二一三・8）をより具体的に捉えようとするための模索であるという点である。そしてこれ以降、「私」が誰を／何を待っているのか問わないことにも注目したい。 これまで否定的な表現を用いながら語ることの多かった「私」が、「胸を躍らせて待っているのだ」（二一三・10）と言う点に注目する。胸を躍らせるという表現からは、期待や希望を込めて「待つ」様子がうかがえる。先の①に示したように「私」はもう誰を／何を「待つ」のか問おうとはしない。その姿からは、「私」が周囲との違いに不安や孤独を感じて葛藤しながらも「待つ」ことに希望を見出す様がわかる。

時限	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
まとめと発展		③「あなた」に呼びかける意味を考える。思判表 ④言語活動1に取り組む。主態 ⑤言語活動2に取り組む。主態	③ここで「私」が語りかける「あなた」（二一三・14）に注目する。第四段落にも「あなた」（二一三・5）は出てくるが、その「あなた」が「私」に声をかけるかもしれない人物に限定されるのとは異なり、第五段落の「あなた」は、「胸を躍らせて待って」（二一三・10）いた何かであるとともに、物語の外にいる「あなた」、つまりこれまで「私」の物語を読んでいた読者をも指し示すような意味を持つだろう。この「あなた」は、物語を外から眺めていたはずが物語に呼び込まれ、「私」が連帯をはかろうとするような効果を含んだ呼びかけであることを生徒に理解させる。 ④この物語の語り手が「二十歳の娘」（二一三・13）であることに注目する。「大戦争」は同世代の男性を召集し、戦地へ連れて行った。そして女性も銃後を守る存在として、〈銃後〉や〈報国〉の中に組み込まれ、戦争を後方から支援する担い手であることが求められていた。そうした皆が一つの方向に向かうことを強いられる戦時下において、「待つ」ことをやめない「私」の批評性を理解させたい。 ⑤「私」の気持ち」は小説を改めて振り返ることで考えたい。「作家の立場」では、検閲（軍部の検閲や出版社の自己検閲）によって表現が制限されるなか、「待つ」の内実を明確に示さないことが、むしろ読者に「待つ」の内実をほのめかす役割を担っているということを生徒につかませたい。加えて、ここでは作家紹介の時間を設け、戦時下の太宰治の創作活動を振り返ってみたい。